
LUMINE

真雪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

LUMINE

【Nコード】

N0988Z

【作者名】

真雪

【あらすじ】

尾形真理子さんがコピーを考案したルミネの広告を元にしたショートショートです。キャッチコピーがそのままタイトルになります。引用元：<http://d.hatena.ne.jp/-design/20090420/1240143691>

恋が終わるのなら、せめて夏がいい。

恋が終わるのなら、せめて夏がいい。

もたれかかった柱、音だけの花火、いつもより少し度数の高いチユーハイ、全てが熱を孕むこの季節がいい。終わりが見えない恋ほど不安定で幸せなものはないと、大昔の演歌にもならないようなフレーズばかり頭に浮かぶ今、街中に星の数ほどある広告塔でこの言葉は一際光って見えた。

蝉時雨がひぐらしに移り、目が溶けてしまいそうな量の涙を抱えて非情に更けていく夜を乗り切る自信は無く、かといって呑めないお酒を無理に流し込んでも匂いが想い出を逆撫でするだけだった。

無意識が辿る重ねた温度は鋭利な刃物にとてもよく似ていて、それに挟まれた傷はもう少し濡れたままでいて欲しかった。あの人と誰かが似ている部分があっても、同じような境遇を空が何度見つめていても、失恋なんて言葉ひとつじゃ片付けられないぐらい、この恋は私だけのものだと思っていたかった。

恋が終わる季節を選べたことは幸せだと願いたい。

涙の乾きを熱帯夜に任せて、誰かの温もりを求めずに越えられる季節は一瞬でも、月明かりが雪に染まるまで傷に浸れるこの季節こそ愛したい。

何粒も湧き上がる夢の跡地は頬を滑り、安い缶の中に溶け込んだ。一気に呷るとプルタブの鉄臭さが酷く鼻について、耽美な夜の在り処に気づけずにいた。

雨が嫌いだったころ、私はまだ、誰のことも好きじゃなかった。

雨が降る度に思い出すことがひとつある。

その頃私たちは溜まり続ける不満や鬱憤を全て、迫り来る春のせいにしていた。それが酷く幼いことだと分かっていながら、友達や家族との争いを遠ざけるために受験だから仕方ないねと澄ました顔で問題集を解いていた。

教室から眺める線のような雨を心地良いと思い始めたのは、他の誰でもない自分自身のプレッシャーに耐えられなくなった去年の冬の終わりから。雨が嫌いだった頃、わたしはまだ、誰のことも、好きじゃなかった。

「遠藤、傘無いのか。」

その人は私が夏から通い始めた塾でアルバイトをしていた大学生で、今も下の名前は知らない。先生というよりも近所のお兄さんってイメージが強く、歳が近いから気さくに話せるのに授業はいたって真面目でみんなに人気があった。特に、受験だ卒業だと取り組んでいてもすっかりお年頃だった女の子に。

私は塾にも気合いを入れて着飾ってくる華やかなグループには属してなくて、その日も確か制服のままだった。友達が風邪で休んだ帰り道、突然の雨は伸び始めた髪をうねらせる原因にしか見えなかったころ。

「これ、持ってきた。俺は今日車だから、帰すのはいつでもいいよ。」

差し出されたビニル傘は店の入り口で投売りされているような安い代物で、断る理由もなく受け取ると突然眉間を強く押された。

「最近、ここに皺漚いぞ。このままだとホンモノになっちゃうかな。」

呆然とした表情を浮かべる私の頭を軽く叩き、先生はすぐ室内に戻っていった。まともな反応を返す暇なんてなくて、次の日も時間

が上手く合わなくて傘も他の先生に託して、合格の報告のときも向こうが授業中だった。だから、私が先生と話した内容は半年通った中でたったそれだけ。

それでもあの帰り道に見たビニル傘越しの雨粒は透明な世界に彩りのある広がりを見せて、虹を見ることはできなかったけど他の誰かが、願わくば先生が見たかもしれないなんて初めて思えた日だった。

「終了5分前です。終わった人は寝ないで見直ししなさいよー。」埋まった解答用紙を指でなぞる。この学年末の結果が出たら、一年の成績表を持って塾に顔を出してみようか。

後から先生が実は車なんて持っていないくて、バイクですぶ濡れになりながら帰ったことを知ったのにそのお礼も言えてない。

馴染み始めた制服姿を見せたらどんな顔をするだろう。あの日から雨を眺めることは特別になった。入学と同時に買った水玉の傘をさして行くのもいいけど、ようやく肩にかかり始めた髪は真っ直ぐな状態で会いたい。だから行くなら湿気なんて忘れるような青空の日だ。

雨が止む気配は無い。久しぶりに傘をさして帰れるのが嬉しかった。

今日は別人みたいなんて 失礼しちゃうわ 嬉しいわ

「姉ちゃん、母さんが風呂入れって。」

「ちゃんとノックしなさい、バカ！」

慌てて鏡を手放したが遅かった。堅苦しい礼装がよっぽど嫌だったのか、弟は帰宅と同時に部屋着に着替えたらしい。

「ちよつと化粧したぐらいで絶世の美女になるわけでもあるまいし、そんな見惚れんなよ。現実とのギャップに耐え切れなくなるぜ。」

「にやにやと意地悪く笑う顔と育ち盛りの背が憎たらしい。少し前まで構ってやらないと泣くほどだったのに、制服を手に入れた途端急に大人びた顔をしだした。男の子って、これだから嫌になる。」

「ほつといて！早く出てってよ、お風呂ならあんたが先に入ったらいいでしょ。」

「とつくにみんな入ったよ、あとは姉ちゃんだけだから呼びに来たんだろ。んな格好したままだと風邪引くって。」

「余計なお世話。さつさと出てってよ、あんたがここにいたらお風呂の用意できないんだから。」

中学、高校と弟の制服はずっと学ランだ。だからネクタイ姿を見たのは今日が初めてだった。初孫の結婚式におばあちゃんがはりきって用意した衣装は、どれも上等なものばかりだった。

私が今着ている黒のワンピースだって、もし買い物中に見かけてもまだ早いかな、なんて思ってしまうから絶対に自分から買うことはできない。肩の露出具合も裾と袖にあしらわれた品のあるレースも、いつもの私服とは全然違う。最も、高校最後の学年になると制服を着ている時間が惜しくてなかなか私服の機会は訪れないけれど、異様な沈黙に顔を上げると、入り口に立ったままの弟はやたらと神妙な顔をしていた。どれだけ澄ました表情をしていても、ようやく十七歳になったそのパーツはまだあどけない。

「今日の花嫁さん、綺麗だったな。」

私じゃない誰かに伝えるように、ゆつくりと口を開いた。

「そうだね。旦那さんも優しそうだっし、きつと幸せになれるよ。」

慎重に言葉を探すような瞳に、少し胸が不穏な動きを見せる。

「用がないなら、早く…」

「姉ちゃんもさあ、ああやってお嫁にいつちやうわけ。」

当たり前でしょ、とはすぐに返せなかった。何を言っても壊れてしまう気がしたのだ。この家に弟が来てから、言い聞かせるようにお互いを呼ぶ私たちの暗黙の了解を。

「その服、すっげえ似合ってる。母さんプロだもん、でもそれだけじゃなくてその化粧してるとほんとにかわいい。」

どんだん口元が強張っていくのを感じた。このまま舌が固まってしまえばいい。そうしたら、

「今日は、別人みたい。俺の姉ちゃんじゃない、誰か他のひと。」

「やめて。」

血の繋がらないあなたをわざわざ弟の枠に押し込めるようなこと、言わなくなつて許される。

「…うん、ごめん。変なこと言った。疲れてるんだろうな、慣れないことしたから。もう寝る、おやすみ。」

言い訳のようにまくし立て、扉も閉めずに廊下の闇へと消えていった。その歩幅は初めて会った幼い頃よりもずっと大きくなった。おやすみは返せなかった。

「…失礼しちゃうわ。」

嬉しいわ、なんて私が言えないのを知っているくせに。

何を着ても かわいくない日も、たまにはあるけど。

いつそ鏡の中で睨むこの仏頂面が私じゃなくなってしまえばいい。本気でそう思い詰めるたび、なんで私服校なんか選んじやっただんだろうつてどうしようもないことを考える。

髪は綺麗にまとめられた。肌の調子も悪くは無い。ペアで買った香水だつて、昨日と変わらずちゃんとあたしに馴染んでる。

それなのに、一体何がこんなに気に入らないんだろう。バイトもできない高校生の小遣いで賄える服飾費なんてたかが知れている。そうじゃなくても制服アイテムは高いのだ。下着から始まってネクタイやリボンまで本当に気に入った物しか買っていないのに、何通り組み合わせを試してもしっくりこない。

朝の待ち合わせまであと三十分。付き合い始めるときに一緒に登校を提案したのは私の方だった。

「はーあ…。」

溜息つくと幸せ逃げるよ。キスの後の息づきをからかう彼の低い声が好き。溜息をつくたび思い出すくらい、その形は鮮明だった。

恋をすれば女の子は可愛くなる。昔から言われてる定説だけど、初めて両想いになって 微妙に違うんだなつてつくづく思う。

相手を好きになって、好きになって欲しくて、女としての魅力に貪欲になる。認められたくて、言葉じゃなくて表情や仕種、ふとした瞬間に伝わる「可愛い」に敏感になる。恋をする前よりもっと、無意識の内に当たり前の渴望が激しくなるだけなのだ。

「…よし、今日はブラウンでまとめよう。」

何を着てもかわいくない日も、たまにはあるけど。やっぱりその一言が欲しいから、鏡の中とあなたの前では笑顔でいなくちゃ。

おりこうじゃなきゃ、おしゅれはできない。

「えー、神崎じゃん！うわめっちゃ久しぶり、背え伸びたねー！」
バイト中の背中に降りかかったのは、ギャル特有の甲高い声だった。

「飯村…なんでこんなところに。」

攻撃するような金髪と濃いメイク、木枯らしを挑発するように惜しみなく出された脚が書店の参考書コーナーから激しく浮いている。周りの視線も気にせずに凶器のような爪が生えた手で口を覆ってきやはは、と笑い出した。

「やつだあー、名字ダサイから呼ばないでって高校んときから言ってるでしょー。麗華ね、麗華。あたしはちゃんとお客様ですよ、神崎はバイト？あーでも似合うね、本屋さんって感じ。」

後ろの本棚で商品を整理している先輩に咳払いを向けられる。分かってるよ、と溜息を堪えた。

「飯村、ちよつと声抑えて。」

「あ、ごめん。神崎って東京に進学したんじゃないっけ、大辞めたの？」

「んなわけねえだろ、今年度の単位は全部取り終わったから里帰りしてるだけだよ。ここは高校んときやってたから、短期で入れてもらってんの。」

「へえ、ここからうち近いのに知らなかった。まあ本屋なんて寄り付きもなかったからなあ、女子高生のときは。」

まだ卒業から一年も経っていないのに、まるで遙か遠い記憶を呼び寄せるように飯村が眇めた瞳で脱いだ制服の重さを実感する。

「そっちは就職？」

「んーん、浪人生という名のフリーター。いいでしょ、今時っぽくて。」

一度だけ、席が隣になったことがあった。そのときも飯村は、こ

んな顔で笑っていた。

「え、浪人？」

「そう。そんな意外そうな顔しなくなっただけでしょ。店員さん、お勧め聞きたいんですけどー。」

「志望校によるよ。偏差値どんくらい？」

かきあげた髪から覗くピアスの数は高校のときと変わらない。隣だった期間が、学校行事が重なってやたらと賑やかだったせいかなん些細なことを鮮明に記憶していた。

「神崎と同じところ。」

「いいから、真面目に。」

こんなちよつとした茶々が得意で、ギャルのくせに気配りが得意な飯村はお年頃の男子たちは当然のように人気だった。おそらく、今もそれは変わらないだろう。

「真面目だよ？」

向き直ると様々な色が乗せられた瞼はほんの僅かに伏せられている。

「…偶然だけど。あたしも今思い出して、びっくりしてる。学科は違うけどね、神崎は建築でしょ。あたしはデザイン。」

ばくん。跳ねる鼓動もまた、何もかもが強烈だったあの頃のように生々しい。

「俺が言うのもなんだけど、高いよ。」

「知ってるよ。だからこうやって少ない小遣い削って買いに来てるんですよ、お勉強用に。」

「親は？」

「受験費と入学金は払ってやるけど、後は全部自分で稼げって。」
「それは、また…。」

予備校から現在の宿賃まで全て親の脛を齧っている俺は二の句も継げなかった。光るブレスレットに不釣り合いな真剣な横顔もまともに見れないまま、無難なものをいくつか勧める。

「だったら住むところ自分で用意するんだろ、地元じゃダメなの

？駅前に服飾の専門あるじゃん。」

「だめなの。おりこうじゃなきゃ、おしゃれはできないもん。」
何か眩しいものが飛び込んできたかのように、飯村のどこか甘い声がかくつきりと輪郭を持つてその言葉を発した。

「…うーん、やっぱりだめだ。どれも高いね、当たり前か。古本屋行ってみるよ、仕事で付き合ってくれてありがと。頑張つて。」
知っている。頭の中で警告のように文字が赤く光る。俺はこの軽やかさの裏を知っている。修学旅行の班長も、文化祭の雑用も、飯村はこうやって軽く受け入れていた。

「飯村！」

俺達の高校は私立だった。バイト三昧の理由が今なら分かる。
黒く縁取られた瞳を丸く見開き、艶やかな金髪がもったいぶるように揺らいた。

「高校んときの参考書とか予備校の教材とか、全部実家に取つてあるんだ。使う？」

「うそっ、いいの！？すごく助かる！」

そんな高いヒールで走るな転ぶ、と言いかけたところでもう一度咳払いがきた。二人で慌てて声を潜める。

「俺、あと一時間であがりんだけど今日でいい？」

「うん、今日がいい。メアド変わってないから、終わったらメールして。」

それじゃあ、とまた軽やかに身を翻す。それからの一時間は、苦手だった古文の時間ようにひどく長く感じた。

「お待たせ。」

待ち合わせは母校の溜まり場になっているファーストフードだった。飯村が腰掛ける隣の席や後ろにも、チラホラと懐かしい制服姿が目に入る。

「お疲れ様。ごめんね、バイトで疲れてるのに。」

コーヒーの匂いなんて珍しくもないのに、飯村の手元のカップが

ら上がる湯気はどこか懐かしく胸の中心に淡く滲んだ。

「立ち仕事だけど慣れればそうでもないかな。飯村はなんかやつてんの？」

「零時から朝までコンビニ。深夜の方が時給いいからね。」

目に見えて荒む浪人生が多い中、飯村の笑顔は高校と変わらず健康的だった。

「じゃ、これ。要点まとめたノートとかもあったから一応持ってきたんだけど、自分用だから字がすげえ汚いんだよね。使う？」

「使う！でも、ほんとにいいの？」

キャンパスノートを抱き締める腕は細く、一人でやりくりする苦労が途端に現実味を帯びる。何かできることはないだろうか、無意識にそう考える自分がいた。

「押入れの中に仕舞ってるよりは使ってもらえた方がこっちも有り難いし。」

「お礼に奢るよ、なんでも頼んで。」

「いいよ、腹減ってないから。それに金貯めてんだろ。」

「でも……。」

俺も飯村のような苦労を経験すれば、もっとスマートなかわし方ができるだろうに。重ねることも浅ましいと、分かっていながらそう思わずにはいられなかった。数式を組み立てることはできても、咄嗟の頭の回転は相変わらず鈍い。

「それよりさ、聞きたいことがあって。」

「うん？」

傾げる首にまた視線がいく。

「おりこうじゃなきゃおしやれはできないって、どういう意味？」俺の問いかけに飯村は軽く視線を彷徨わせてから、重大な秘密を打ち明けるように姿勢を正した。つられて俺の背筋も伸びる。

「あのね、なんか途中で日本語おかしくなるかもしれないんだけど、聞いてくれる？」

「おう。」

もつと積極的な立場にいれば、教室の中でもこんな神妙な顔を見る機会もあつただろうか。

「おしゃれってなんだろうって、卒業してからずっと考えてたの。」

頬づえをつく仕種とピンキーリング、俺はきつと飯村について知らないことがたくさんある。

「よくある話だけどさ、制服ってみんなデザイン同じじゃない？だからなんだか窮屈に感じちゃって、あんまり好きじゃなかったんだよね。他校と比べて可愛かったのは確かなんだけど、どこを見渡しても自分とおんなじ服を着てる人がいるのがすごく嫌だった。」

そういう時期だったんだろうね、と長い脚を組む。隣に座る男子高校生の二人組みがそれにチラリと視線を送ったのは飯村も気づいているだろうが、気にする様子は無かった。

「でも卒業して、アルバイトだけど一日中働いたりして、コンビ二にも制服はあるけど行き帰りは私服なんだよね。きちんとしたところにお勤めすればスーツだったりもするけど、やっぱり自分で用意するわけじゃない。そうしたら、おしゃれって私服の中でしか表現できないのになって思い始めて。」

間延びした語尾と独特な略語たちに隠れていただけで、飯村の話し方ははつきりと自分の考えを持つことの重要さを知っている人のものだった。

「高校入る前からこういう、ファッションに関わる仕事には就きたかったんだよね。だけど売る人になりたいのか作る人になりたいのか考える人になりたいのかも分からなかったからさ、そんな適当な気持ちで進学してもしようがないかと思って専門は受けなかったの。ギリギリ届いてはいたんだけど。」

賢明な判断だと思った。現役にこだわってとりあえず進学、なんて大学生は恐らく都内だけでも掃いて捨てるほどいる。

「ちゃんと考えてみようって思ってから、ココ・シャネルの伝記読んだり、おしゃれだなんて思う人たちの名言調べたりしてさ。あ

んなに勉強したの、受験以来かも。」

巨大な鏡を用意したい。飯村の前に座って話を聞いていると、俺じゃなくてもそう思う人がいるはずだ。本人に見せてやりたいと思うほど、生き生きと話すこの表情は直視できないほど美しい。

「でね、もう何万人のひとたちが気づいてることなんだけど、おしゃれとかファッションって外見のことだけじゃないんだよね。別に顔は整って無くてもどこか綺麗な人っているじゃない？ 気品とか内面の美なんてあたしには似合わないけどさ、そういうのって凄く大事だと思う。」

そんなわけあるかよ、こうして言葉も出ないくらい見惚れているのに。喉まで出掛けた言葉を無理矢理飲み込んだ。きっと俺が一流の写真家だったら、この瞬間の全てをフリンダーに納める。いい写真ですねと誰かに評価されれば、被写体に恋をした瞬間だったんですと胸を張って言える。

「生き方って答えも間違いではないと思うのね。漠然としていいなら正解だと思う。でも、それって響きは良くてもどこかあやふやじゃない？ お金も時間もかけて勉強することが、そんなんじゃないかなと思うて。」

だけど現実には高尚な技術も純真な口説き文句も持ち合わせてはいないから、ただ話を聞くことしかできなかった。

「で、ここまで偉そうなこと言っというて結局今出した答えもはっきりしてはいないんだけど…」

それまで連ねてきた言葉を区切り、呼吸を整えるように一度小さく息を吸った。

「おしゃれって、粋のことじゃないかなって。」
「粋？」

余計なことを言ってしまったように相槌に徹していたが、あまりに聞き慣れない単語が飛び出したために反射で身を乗り出した。

「なに、粋って。」

「おしゃれって、漢字で書くと洒落ってつくよね。由来を調べて

みたら、機転が利くとか垢抜けてるとか意味は色々あるけど、服装ってTPOを大前提にしないと本領発揮できないってことかなっても思ってた。」

常識の範疇であるはずなのに、何か壮大な事実気づかされた心地だった。密かに動揺する俺をよそに飯村は話を続ける。

「流行りの服やメイクもやっぱ可愛いしすっごく大事。だけどそれより、好きな人が褒めてくれた髪型とか、大切な思い出ができたときに着ていた服とか、お母さんがおさがりしてくれたネックレスとか、身につけてるだけで自分のエネルギーになれるものっていうか……うーん、そういうものたちに包まれている自分を大事にできるもの、かな？それが粹で、おしゃれなことかなって……」

そこまで言って飯村は急に顔を覆った。本屋では意識すらしなかったのに、今は咄嗟に薬指を見てしまう。指輪はない。

「ごめん、思いつきり語っちゃった！しかもなんか支離滅裂だし！」

「いや、いいよ。聞いてて楽しいし、俺も考えられる。なるほど、粹ね……。で、おりこうっていうのは？」

うつすらとチーク以外の紅が残る顔が綺麗な指の合間から見えた。それだけで緩んでしまう口元を隠し、続きを促す。

「さつきTPOって言ったのは社会的な場面もちろんあるんだけど、自分と相手の細かい感情とか、それが合わさった雰囲気をちゃんと読み取れる人のこと。そして、それに最大限に相応しい身なりが整えられること、かな。」

「話聞いている限りでは、飯村は十分におりこうさんだと思うんだけど。」

「あたしが分かっているのは表面の部分だけなの。言ったでしょ、はつきりしてないって。自分が一生の仕事にするだけの奥底の部分は掴めてないの。」

一度我に返ってから伏せがちだった瞼を見開き、飯村は真っ直ぐに俺を見つめた。

「だから、大学に行きたいの。ファッションのことだけじゃなくて、色んなものが見たいの。あたしこんなだからさ、そんなに一生懸命勉強してたことないんだ。そういう時期をちゃんと乗り越えないと、本当の意味で大人になんかなれない気がする。」

今度はこつちが赤面する番だ。どの面下げて大学の偏差値なんて語っていたのか、思い出すだけで埋まる穴を求めたい。

「ってことなんだけど…どうかな？」

「いや…いいと思う。すげーいいと思う。ごめん、俺語彙力ないから適当に聞こえるかもしれないけど、これかなり必死だから。」

「ちゃんと伝わってるよ。嬉しい。」

たつぷりの睫毛を柔らかに瞬かせる、くらくらするようなこの笑みを何度見逃したのだろう。戻らない時が本気で悔しかったのはこれが初めてだった。

「もう時間だし、バイト行こうかな。聞いてくれてありがとね、なんかすつきりしちゃった。」

「あのさ、飯村。」

タイムマシンはいつの時代も望まれている。開発されない理由のひとつは、積み重ねの先に生まれる未来でしか人が生きられないことを俺たちの本能は知っているからだ。

「俺、年度明けるまではこつちにいるから。ちょっとでもつまづいたらすぐ呼んで、絶対行く。」

夢に手が届くまで、傍にいたいと思った。そんな理由で恋を始めた俺がどれだけ幸せかを伝えるために、今ある全てで未来を紡ぐ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0988z/>

LUMINE

2011年12月3日20時59分発行